町田市立武蔵岡中学校
バスケットボール部通信
令和３年１２月１７日
No.２５　顧問　久保田浩史

～継続は力なり～

～町田市新人大会を終えて～

１１月２８日（日）鶴川中会場での新人戦２回戦での敗戦により、武蔵岡中の新人大会は終わりましたが、翌週（都大会決め）、翌々週（決勝戦）と町田市大会は続いており、審判員として携わらせていただき、多くのことを感じることができたので、この部通信にてお伝えさせていただきます。

まず、結果として私達が敗戦した忠生中学校が都大会出場を決めました。昨年度から何度も何度も練習試合をさせていただいている学校です。私には**「頑張って必死に努力を続けている人（チーム）が、最後には良い想いをするべき」**という考えが根底にあり、**良い思い＝良い結果とは限りませんが、**昨年度からの忠生中の生徒たちの苦労や努力を近くで見る機会が多かったからこそ、忠生中の都大会出場を心から祝福することができました。本来、自分たちが勝てなかったにも関わらず、他校の勝利を心から祝福することはできません。ではなぜ、心から祝福することができたのかというと、残念な理由かもしれませんが、正直、武蔵岡中のバスケットボール部の活動に対して、特に夏休みの後半の夏季大会を辞退する前あたりから、技術レベル・部員数に関係なく、**自信をもって誇れるほどの努力をみんなで積み重ねることができたのか**・・というところに、私自身全く自信がもてていなかったのが正直なところです。新チーム発足から全員が本気で努力を継続することができていれば、１回戦で敗戦したとしても本気で悔しさが込み上げ、**「最後の夏は都大会出場決めてやる」という一心**で、他校の勝利を祝福する気持ちなどもてなかったと思います。

要するに、技術レベル・部員数に関係なく、町田市内で勝ち上がっていったチームと同じ土俵で戦うための覚悟や努力の積み重ねが足りていないと、顧問でありながら感じてしまっていたのです。

そのため、２年ぶりの公式戦勝利の喜びを感じたことは嘘偽りのない気持ちですが、都大会出場を達成するまでの努力を部員全員が出来ていないと、身に染みて感じてしまっていたということです。準決勝・決勝の審判をさせていただき、本気で泣いて喜びを分かち合うチームや負けて悔しがるチームを間近で見ることで、選手たちの必死なプレーや顧問の先生方の熱い思い、それに裏付けされた日々の練習量や必死な努力をオンザコートでひしひしと感じたからこそ、**「自分たちは本当にこのままでいいのか」**と感じ、あえてこの部通信に記載することを決めました。

やはり**本気で取り組んだからこそ、得るものがあるし、本気で取り組んだ人にしか感じることができないもの**があるのと再認識させられました。そして、この機会を自分のチームにしっかり伝えていかないと、数少ないけど決意して入部してくれた部員のみんなにも失礼になると感じました。

過去の取り組みを単なる後悔、失敗としてはいけません。人はどんなときでも**「いま、この瞬間を生きる」**ことしか出来ず、**「常にこれからどうするか」**と考えて行動するしか道は拓けません。この通信も過去を省みるために書いたわけでなく、**「これからどうするか」**を大切にしていきたいからこそ、正直な気持ちを書かせていただきました。良い想いができるかどうかは、バスケット経験歴や人数は、関係ありません。自分達がどのような気持ちで、一生に一度しかないこのバスケットボール部の活動に取り組んでいくかが大切です。

みんな一人一人は努力をしているし、体育館で一緒に時間を過ごしてきて、中途半端な気持ちで活動していると思ったことは、一度もありません。しかし、その前向きな気持ちを持ち続け、その気持ちが本当に一つになって活動できていると感じることができるかは、「これからの活動次第」だと思っています。一生に一度しかないみんなと活動できるこれからの時間とみんなに対する、期待と思いを込めて今回の通信を作成しました。**「自分たちにしかできない武蔵岡中の活動をこれから継続していきましょうね。」**